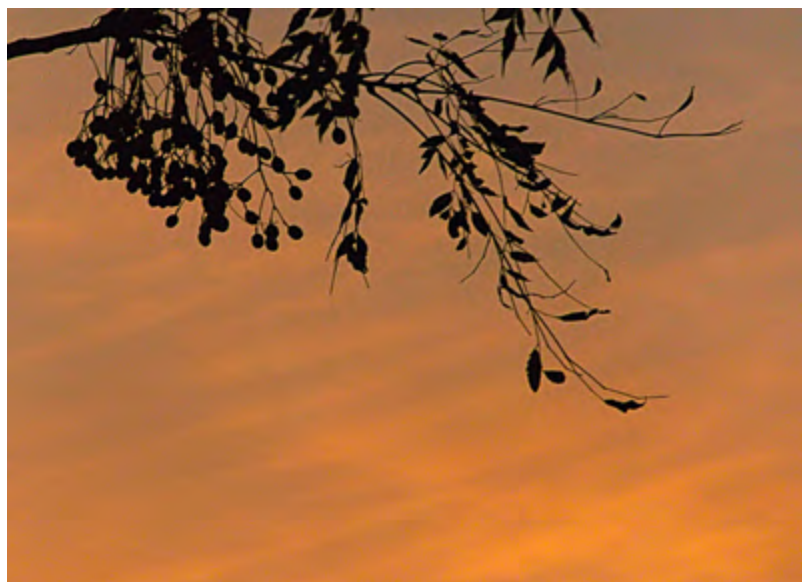


あそ 12
2013



われらは何処から来るか？
われらは何であるか？
われらは何処へ行くか？

ポール・ゴーガン



Gauguin
ゴーガン
自画像

ファブリ世界名画集
平凡社版より

あそ

十二月

二十日月

佐藤喜孝

秋の風ものに憑かれた百日紅

人のこゑに近づいてくる秋の滝

おぢいさんは洗濯にゆく二十日月

秋の雨遠くで人のうごきゐる

老人が運動會で靴を脱ぐ

菊なます母とふたりで體重計

星座表のめがね星月夜のめがね



第十一条 国民は、すべての基本的人權の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人權は、侵すことのできない永久の權利として、現在及び将来の国民に与へられる。

第十二条 この憲法が国民に保障する自由及び權利は、国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならぬ。又、国民は、これを濫用してはならないのであつて、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負ふ。

第三十一条 何人も、法律の定める手續によらなければ、その生命若しくは自由を奪はれ、又はその他の刑罰を科せられない。

世の中が騒がしいので憲法をひらいてみた。憲法は国民のためのもの、国家を利用するものではないらしい。

運動会

大日向幸江

黒セーター縁なし眼鏡のジョンレノン
炒豆を買ひ来て釣瓶落しかな
曇天を見上げてみたる案山子かな
和やかに福耳羅漢小鳥くる
いちにさん笑いながらに木の实落つ
玉入れの同じ数入る運動会
秋の陽をぞんぶんに受け鯉の口

晩秋初冬

木村茂登子

腰紐で決める着こなし初袷
银杏を拾ふすべなし去りがたし
栗の実の渋皮までの三つ揃ひ
煮こぼして煮こぼして栗の渋皮煮
足裏のことさら寒き台所
父の香の失せぬ形見の冬帽子
顎髭の似合ふ男の冬帽子



栗の実る季節になった。
先日中津川の栗づくしのお土産を
いただいて嬉しく賞味した。
ところで、プロの洗練されたお菓
子は勿論素晴らしいが、私は手作り
の渋皮煮が大好きである。
何度も煮こぼしてアクを抜き、
マツタリと甘く仕上げた栗の旨さは
格別である。
「栗は野人なり膚も葉もガサガサ
と朴訥にいかにか巧言令色を嫌えばと
て毬の逆茂木厚皮の鎧なほその下に
渋染の鎧下までつけて奥深く甘き心
を秘するはあまりならずや。」
徳富蘆花の文章であったか今もつ
る覚えながら記憶にのこるこの言葉
の調べが浮び上ってくる。
今年も実りの時をむかえたがあの
厚皮を剥く力がもう私には無い。

新 秋

齊藤裕子

どん底でも笑へてゐるよ赤まんま
身に沁むや友の写メール虹ふた重
冷まじや濯かれてゆく腸の中
若医師の笑顔頼もし秋日和
手術の日朝陽に光る鱗雲
麻醉一瞬瞬時覚醒秋夕刻
秋高し朗らに話す癌患者

冬初め

篠田純子

ひよつとこの白目が見てる小六月
うろこ雲けふは閉ざせる神楽殿
テンションを上げばや豹柄冬帽子
郁子の種しゃぶって捨てる余生かな
鵜の嘴と出くはしてゐる鯢の群
仏頭の穴を覗けり枯はちす
すがれ虫ひとり歩くをせかしをり

闘っていくしかない。分かっているも、何故、私がこんな病気に?! という思いが、打ち寄せる波のように私に襲いかかってくる。医師から次々示される診断結果を、冷静に聞きながらも打ちのめされてしまう。人間の想像力は、時には過酷なものである。自分が能天気な極楽蜻蛉だったらどんなに楽だろうに思う。

必ず治る、治って見せる。自分にそう言い聞かせながら、これから始まる抗癌剤治療に備えて、体力回復に励む日々である。自分を支えてくれる愛する家族や、応援して下さる多くの方々のお優しさに応えるためにも。自然災害や事故で突然断ち切られる命に比べれば、まだ私には、命の時間も希望もたつぷり残っている。

十月十日に虎ノ門の金刀比羅宮の大祭に行った。朝から、里神楽おかめひよつと踊りなど境内は賑やかだ。御朱印を戴いてから、昇殿して大祭式を見学した。御簾を巻き上げ献饌、御言詞呈上式は進む。巫女二人で本殿で浦安の舞を奉納する。平安時代は、このようであったのかと思うような巫女の装束と、雅楽の調べに千年前にタイムスリップしたかのようだ。美しい檜扇で顔を隠す様子は源氏物語の玉鬘を想像してう。

玉串を奉納しお神酒一合を戴いた。外へ出て空を見上げると四方八方ビルに囲まれている。ビルの狭間の空間で床しい時を過ごすことが出来、嬉しい反面狐に狐につままれたようでもあった。

鯖 雲

定梶じょう

出稼ぎに行かうと思ふちんちろりん

芋虫よ四柱推命汝は信じ

蛇穴に入りたるしつぽまだ残し

うねうねと来て一の坂鳥渡る

蓑虫が懂がる飛行機雲の空

南都奈良旅の途の月峰を近み

旅三日仰ぐ鯖雲懐しむ

☆

須賀敏子

鍵掛けぬ暮しありけり虫の秋

宝永山黄金色の蓼もみぢ

不忍池しのぼずに白鷺一羽蓮の実

台風の行方気にしつミシン踏む

現世の笑顔戻りて秋深し

晩秋の彼の世此の世のあはひかな

「お兄ちゃん」只呼んでみる秋の空



へひとの家えの熟るる酸漿羨しむも」とほしい、の元の語「ともし」の動詞化した「ともしむ(ぶ)」は、受験生用の辞典には出てこない。大きな古語辞典では「羨しむ」を、自動詞で四段活用、他動詞下二段活用としていて、ある辞典では他動詞で四段活用とする。

「羨しぶ」もある書では上二段活用とするかと思えば下二段の扱いをする辞典もある。文献の用例から類推して古語を説明することが多いからである。

マ行とバ行は音が通るので昔からよく入れ替わるわけだが、「羨しむ」と「羨しぶ」で活用の種類が異なるというのも理不尽なはずだ。

冒頭拙句の「羨しむ」も、遣った私は何活用だか頓着する必要がないわけだ。

豆腐汁

竹内弘子

蜜柑に爪あてし匂ひのとどく距離

よく切れる鋏の欲しきそぞろ寒

さくらもみぢセーターの胸に留め

渋柿の色づき初むる去り難く

朝寒し速歩の人に追ひ越さる

三島忌の市ヶ谷上空機影さす

びらうどのやうなワインを酌む夜長鳥

栗御飯

田中藤穂

ベビーカー街に溢るる秋日和

美術展同じ帽子の人と遇ふ

酔芙蓉あげて新米戴きし

うまかりし母の糠漬秋茄子

野良猫が部屋のぞきをり十三夜

赤煉瓦倉庫は秋草のむかう

栗御飯同じ戦時を生きし人



12

毎日俳壇の大峯あきら選に小栗たゑという方がよく出ている。それが喜孝さんの七座句会でご一緒した安達房代さんの上司の御母堂と知ってびっくりした。私がたゑさんに注目し拝読しているのが、房代さんからたゑさんに伝わってとても喜ばれたと伺った。たゑさんの句が載ると、私は自分の佳句書き留帳に書いていたが、今年の五月二十七日に載って以来出なかった。お歳ももう百才に近い筈、お身体の不調か、もう出句の気力がなくなられたのかと秘かに案じていたら何と今日、十月七日俳壇に、二席に見つけました。

美しき世を供へ今日の月 たゑ

お子様方はそれぞれ成長されて離れて御活躍の由、お一人暮しと伺っております。句は銜いのない澄んだ老境の深みを感じられて、しかも衰えぬ創作力に感服いたします。お住いは房総の自然に恵まれた處の様で、身の廻りからどんどん土がなくなっってゆく都会住いの私には羨ましくも思われます。

今朝たゑさんの句を朝刊に見つけ私も元氣百倍、私も頑張らねばと自分に鞭を当てたところです。

13

小鳥来る

長崎桂子

安らかな闇でありけりちんちろりん

舗装路の継目いとはぬ曼珠沙華

十月の海女小屋昼餉賑へり

秋湿り海女小屋の昼大浅蜷

靄漂ふ波は静まり秋さざえ

仰ぎ見る木に育ちたり小鳥来る

小鳥来る娘も帰り来て賑しき

☆

早崎泰江

法師蝉終焉つげるかのごとし

朝露を蹴散らしとべりきちきち飛蝗

杜鵑草どこからとなく虻をよぶ

石路の蕾揃へり朝の窓

真新しい靴軽やかに木の実踏む

廃屋をことなく通過雨台風

同じこと幾度も言ふ秋深む

健康寿命という文字を新聞雑誌やテレビでよく目にします。

自立して生活できる年齢を平均した「健康寿命」と言う考え方がいいです。

後期高齢者になって来ると、骨粗鬆症の人も多くなり骨折をすれば、「寝たきり」の状態になる方が増えるので三十歳時の体重を維持し食事に気をつける。体の安定だけでなくいろいろと起って来る逆境に動じない心の安定と強さも必要になって来ます。と四日市保健所の方のお話をお聞きした。骨折を防ぐには「運動の習慣を身につけ骨を強くしましょう」で無理のない運動を継続する事を心掛けてほしいです。とおっしゃった。努力しなきゃと思いません。



木瓜の実

森 理和

日の翳りさつと日向へ秋の蠅

訃報受く郁子と木鋏左手に

木漏れ日の目潰しに郁子見失ふ

百均の焼芋買うて園帰り

横這の小水放ち秋日和

秋夜長づきんづきんと右の膝

木瓜の実の枝先に三つ母の庭

秋夜長

吉成美代子

城垣のところどころに萩の花

黒揚羽市電よぎって消えていく

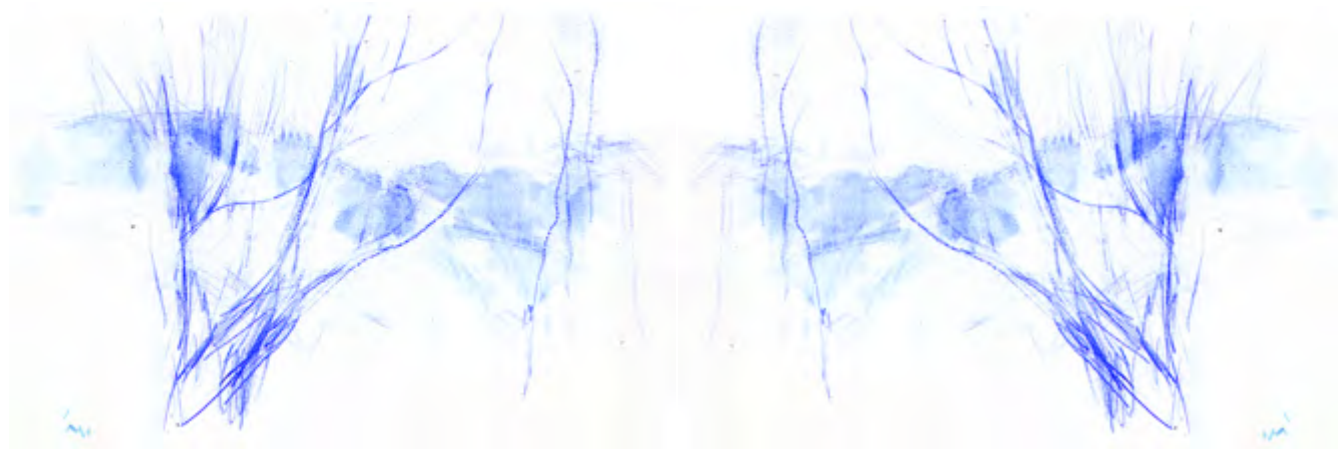
秋の雨たうもろこしがお買得

彼岸花見えかくれして友の行く

東屋でほほばるむすび秋の雲

秋の園ことばの跳ぶ距離跳ばぬ距離

目覚めれば乗鞍岳の岩紅葉



☆

吉弘恭子

夏落葉踏みて新芽のはや氣息

熒惑を指で挟まむ濁酒

水澄めり母の背中で聞きし唄

戦前を真似る曼珠沙華のあか

五十歩と百歩のまなかさくらもみぢ

鳥容れて梢のにぎやか初秋かな

間引菜の手に残りたる痛みかな

☆

赤座典子

いちじくや鍵をかけたる記憶無く

初雪草と名を教はりぬ秋日和

冷ゆる駅介助求める声高く

二人暮し薯蕷漸う使切る

鴨の二人暮しを覗き込む

曇天の高速道路冬用意

湯の宿の池に迫出す葛の花



二〇〇九年から「終わりと始まり」というコラムが朝日新聞に連載されている。執筆者は 作家の池澤夏樹で、毎月一回、その時々中国社会現象について論じている。分かり易い文章で 論理的に書かれている内容は、普段もやもやとしている自分の思いが、的確に言い表されていると感心して、よく切り抜いては読み返していた。

この七月に、二〇一三年迄の四八篇を収めた単行本が出版され、保存版として購入した。

筆者の作品も、芥川賞の「ステイルライフ」以来 単に面白いだけでなく、広い視野と提言が感じられ、今時非常に貴重な人材だと殆ど信奉者となって、毎月のコラムを楽しみにしている。

さぐれすわ郎一

☆

井上石動

佳品非佳品なべて我等が文化祭

浮雲の懸る菩薩嶺柿の秋

鹿鳴くやみささぎ脇の宿にみて

すめろきの奥津城おほふ紅葉かな

もみつ葉を蹴つて村宮バス来り

冬月の雲のまにまに流れけり

臥すひまも間遠となれよ冬至也

とき・ば・もの

ネットで「アマゾン」なる古本屋さんを知り、ガゼン利用させてもらっている。なにしろ「安い・綺麗・丁寧」な本が届く。送ってくたださる相手を想うと、感動の涙。玉にキスは、@250円の送料付加。で、「蛙はなぜ古池に飛びこんだか 著：李 御寧」を読んだ。

以前、「古池に蛙は飛びこんだか 長谷川 權」を読んでいたの、二冊の差異も面白かった。李さん曰く一句を具象的・臨場感たらしめるためには「時・場・物」とか。もちろん、一句の裏に「人」が登場すれば、なお佳とか。

で、私は考えた。時：季語でまかなえるが、秋の声・・・では、漠然とし過ぎ。もつと「期間限定」季語を。場：舞台設定。読者が具体的に連想できる舞台がいいのだ。物：湘子が言っていた。「二句にブツだけ出せばいい。他は要らん。やい、ブツを出せ！これじゃあ強盗だね・・・」と。で、我が駄句群を覗いてみた。 嘩然 慄然 愕然、トホホ・・・。 みなさんも、おりあらば「とき・ば・もの」の呪文でチェックしたらいかがでしょうか。

もの毀れと言ふや人生くや行く年

人に相性があつて、大方は九星、生年月で掴める。結構抜け道があり、吉凶プラス・マイナス・ゼロにもなる。本命は凶、月命吉で助かり干支で難を逃がれたり。私の処など家内が五黄申で、私。二黒寅の反対側に位置し大凶だが、九星では土星同士比和関係にある。だから五十年何とか持ったと思つている。六十歳を過ぎると相性の善悪はなくなると或運命書に書いてあつたが、高齢になれば酸いも甘いも解つて丸くなる。新しい暦が来ると遂思い出す。

相性はあつて無きもの今年酒

△二〇〇六・十二・十六△

来るしてマスクを白きな雪を

前にも幾度か触れたが、毎日新聞朝刊に掲載の「季節のたより」坪内稔典氏の一句を平成19年12月17日から書き込んでいる、まる2年になるが、まだ瀧先生は出て来ない。かつての仲間の三池泉の3回は異例だったが、この頃のものには全く面白くない。

コンビニのおでんが好きで星きれい 神野 紗希

熱燗や男が先にごめんなさい 小西 雅子

雪雪雪雪雪ねむくなる葉 北村 美都子

雪はふーわふわ弟はハハハ 西田 有希

稔典氏は女性好みのようなだが、俳句も世の末の感がする。一般の人にこれを俳句とは思われなくな

△二〇〇九・十二・二十一△

蟋蟀の貌がどんどん大きくなる 佐藤喜孝

ななかまど小屋はしたくを始めけり 井上石動

巡回のナースと入りし秋の蠅 大日向幸江

夏終る重き荷おろしたるおもひ 木村茂登子

にほどりの浮かんでこない昼の虫 篠田純子

えんまこほろぎ包丁がなまくらで 定梶じょう

釣人に餌ねだりをり秋の鯉 須賀敏子

コスモスへ遠くより風到りたる 田中藤穂

鶏頭に触れて伯母様ふと浮かぶ 長崎桂子

台風一過歓喜のごとく蝶の飛ぶ 早崎泰江

牛蛙空気の漏るる秋の恋 森 理和

がま池の落葉もいちど裕子と行こつ 吉弘恭子

風の間穂絮つき初む蒲の原 赤座典子

台風や溝川悶え溢れたり 長崎桂子

めらめらと命燃やすや葉鶏頭 斉藤裕子

笑へ笑へまだ生きてゐる秋の雲 々

喜孝 抄



あかんぼが河馬のとなりで三尺寝 佐藤喜孝

可愛いあかんぼの寝顔が浮んできますが、河馬は動物園なのか、それとも木の遊具でしょうか、にこやかにそれを眺めている。

お爺さんの微笑ましい情景です。(桂子)

ななかまど小屋はしたくを始めけり 井上石動

鮮やかな赤に紅葉する美しい「ななかまど」を訪れる。秋の山の客との再会を思い浮べ支度に余念がありません。(桂子)

季語・季題は日本語の中でも特殊な詞。『七竈』とだけで晩秋に赤く色づいた葉や、実のことを季語では指す。普通日本語の中ではそこまで決めつけてはゐない。俳句づくりには歳時記は必

需品といふことである。

この俳句の七竈はまさに季語。小屋が支度を始めたといふが何の支度だらうかと訝る。この季語があることにより、冬への支度であると想像できる。「小屋」は山小屋とか別荘とか炭焼小屋などのやうに大自然に包まれた小屋であらう。

(喜孝)

巡回のナースと入りし秋の蠅 大日向幸江

幸江さんが入院生活をされてゐたときの実体験であらう。このやうなことをおもしろがる、興を覚えるといふのは俳句作りの余得、心に余裕が持ててゐる。変化の少ない入院生活で興の起きた一齣である。〈喜孝〉

穂芒のハラリと解けて風まかせ 木村茂登子

秋を感じる北西のやや強い風がやって来る頃に出会える光景です。ふわふわと宙に浮いた穂先が、何処まで行くのかなと、ふと考えた事がありました。(桂子)

ピクツとして硝煙にほふ運動会 篠田純子

ようーいドンのピストルの音で先ず驚いて五十米とか百米に駆け出した自分を思い出しました。作者は走る子供の表情を確り見た。細やかな観察眼です。(桂子)

夏終る重き荷おろしたるおもひ 木村茂登子

ここ数年の暑さは実感としては過去とは違ふやうだが、冷静にみると過去とは観測点の場所や数が大幅に違ひ、昔の測候所があったところと今アメダスある位置とのデータでは単純に比較ができないさうだ。そうはいはれても暑いものは暑い。特に夜の暑さには閉口する。この暑さを「重き荷」とは実感がある。言ひ得て妙。「人生は重き荷を負うて遠き道を行くがごとし」が口をついた。家康の遺訓とおもつてゐたが後世の人の作ださうだ。(喜孝)

にほじりの浮かんでこない屋の虫 篠田純子

鳩は池沼に潜つては小魚を探しに行く。しばらくするとおもはぬ所にぽっかりと浮ぶ。鳩鳥が水中に消えた水面。昼の虫が鳴いてゐる。少し緊張感のある閑寂なひととき。面白い切取り方である。井の頭の池にも鳩がゐるが、その水族館に鳩が飼われてゐる。潜るとき目に薄い幕がかかる。普段見慣れた池の中を見られるので行くと立ち止ってしまふ。運動会の句の「硝煙の臭ひにふと戦争のイメージが読むものに浮びました。(喜孝)

泣きやむと遠き鯛声を継ぐ

定梶じょう

やつと秋めいた頃の夕方に遠くの「かなかな」の鳴声を聞き、ふかい情緒に耽る一時です。

(桂子)

えんまこほろぎ包丁がなまくらで

定梶じょう

わが家は建替へる前は戦後すぐ建てたスレート瓦葺の木造平屋。えんまこほろぎもかまどうまも家の中に棲んでゐた。このやうな厨が想像できる俳句である。『包丁がなまくらで』はなんとも面白い。この面白さを伝へたいのだが難解この上ない。俳句が散文化できないのはこの俳句が『俳句』たる所以である、などと逃げてみる。私にはなつかしい生活が厨の情景を通して浮んできた。(喜孝)

釣人に餌ねだりをり秋の鯉

須賀敏子

釣人も釣れない無聊を慰めるのであらう、近寄ってくる鯉に餌を投げてゐるのかもしれない。鯉もそれを知つてゐるから釣人に寄つてくるのであらう。敏子さんも表現に幅が出てきた。

釣人のまはりに遊ぶ通し鴨

早崎泰江

も同じ趣向で面白い。(喜孝)

秋暑しどこまで洩るる汚染水

田中藤穂

今年は十月に入つてもとても暑く「洩るる汚染水」は多分、東日本大震災による、それ以後の状況とします。私は新聞やTVニュースで知るのみで、暑さと危険な不安の中の多くの方の生活は如何ばかりか、一日も早く希望の持てる生活が得られます様に願つて居ります。(桂子)

コスモスへ遠くより風到りたる

田中藤穂

コスモスと風。俳句でもおなじみの組合せである。

絵葉書のコスモスの風もらひけり

赤座典子

コスモスのさざめく笑ひ風一揆

渡邊友七

コスモスや風に靡いてしなやかに

長崎桂子

これは「あを」の仲間の「風とコスモス」である。わたしのデータベースの中ではコスモスと風の組合わせは「%」ほどであった。十句あれば一二句はお目にかかることになる。(わたしもその仲間である)藤穂さんはこのやうなことは先刻ご存知。『遠くより至りたる』は何物かを見通した視線である。この遠くは何処からなのかは藤穂さんは承知してゐる。悠遠な風である。(喜孝)

廢屋に十五夜の月おしみなく

早崎泰江

今年の十五夜は、本当に素晴しく煌々として、やや枯れかけた草も一本一本はつきりと見えた夜でした。それを別け隔てなく万人に「おしみなく」与えていただき、授けられた明るい夜は楽しい夜でした。(喜孝)

鶏頭に触れて伯母様ごと浮が

長崎桂子

人は些細なきっかけで過去を思ひ出すことが

台風一過歡喜のごとく蝶の飛が

早崎泰江

台風一過の青空は何事もなかったといふおも

ひと共に仰ぐ故か何とも気持がよい。あの雨風を何処でどのやうにして難を逃れてみたのであらうか不思議でならぬ。その蝶が出てきて舞つてゐる。「歡喜のごとく」は泰江さんの心を反映してわかわかしい。(喜孝)

牛蛙空気の漏るる秋の恋

森 理和

牛蛙の鳴き声を空気の漏れたやうだと聞き止めた感覚はおもしろい。さういはれればさう聞えてきた。牛蛙は秋も恋をするらしい。牛蛙は一途に真摯なのだが、をかしみをさそふ句だ。

(喜孝)

蒲の穂の根方の水の盛り上る

森 理和

前句は聴覚、この句は視覚の利いた句。表面張力であらうか？。蒲の茎に接する水面が、茎に添ひわずかに盛上がつてゐる。水辺の閑寂な

景色を想起させる。自然の一部を切り取りながら、元の大きな景色を浮び上がらせる技法の優れた句。(喜孝)

左右見て赤信号を渡る自転車

吉弘 恭子

近頃は自転車を交えた事故が増えています。私の知合いも二人が続いて自転車で大怪我をし、手術を受け入院をしました。信号と規則を必ず守って自転車に乗って欲しいです。もちろん私自身安全を第一に心掛けて、日々利用して居ります。(桂子)

がま池の落葉もいちど裕子と行こつ

吉弘 恭子

六本木と題する作品。句会で「秋の雲尾鰭つくから黙つとこつ 裕子」の最後の「つ」が要るか要らぬかといふ話になった。口にすればどちらも同じ音に聞えるが、見た目では違ふ。表

音文字とは違ふ働きを「つ」はしてゐる。恭子さんは「つ」の擁護をされてをられた。掲句は、裕子さんの句を下敷にして作られてゐる。裕子さんへの応援句である。(喜孝)

掌に色無き風のやはらかし

赤座 典子

じりじり照りつけ、少々痛さも感じた時もあった夏の太陽。季節も移り日差と爽やかな秋風は、やはらかさを運んでくれたと、繊細に喜びを表現してらっしゃいます。(桂子)

風の間穂絮つき初む蒲の原

赤座 典子

抒情あふるる句。蒲がいつの間にか穂絮を付けはじめた。蒲の原は風に敏感。その風の間¹⁾に付けたのだらうか、と詠んでゐる。上五「かぜのまに」と詠むのも一方法か。(喜孝)

朝一の鳥の声も夏疲れ

斉藤 裕子

鳥は早起きで早朝から泣喚いでいる。その中に「ギヤーギヤー」と聞える嘎れ声の鳴声がある。鳥も夏ばてで、ひどい声になりました。(桂子)

台風や溝川悶え溢れたり

長崎 桂子

「台風過舗道葉っぱの展示会」「台風過新しき雲季醸す」と今夏体験した台風の怖ろしさを詠まれた。いつも見慣れ親しんでゐた溝川が水量が増し溢れてしまった。「悶え」といふ擬人化が溝川の様子、そして作者と溝川の一体感を表してゐる。(喜孝)

めらめらと命燃やすや葉鶏頭

斉藤 裕子

後の記事で入院、手術との御事を知りました。それまでの診察、検査の日々はお辛かったとお察しいたします。私も十四年前に、手術を受ける前の検査をしている時に気力を無くして、本当に情けない状態でした。文中に「心を強く手

術に臨んで参ります」との其の時の、ご心境を
独白なさったとご推察いたします。

一日もお早い御回復を、心よりお祈りいたし
て居ります。(桂子)

作品欄に投稿された作品であるが、特別作品
として発表した。このやうに強い表現になった
のは作者の譲れない今の心境である。他の句を
読んでも強い衝撃を受ける。そして作者の一朝
一夕で得たものでない強靱な精神力に襟を正す。
私の駄文を制する気概のある「葉鶏頭」の作品
群である。(喜孝)

東京タワー

吉宗も浴びにしいちやうもみぢかな
雪富士はるかしばし空中浮遊せり
遷東のタワー目指すや冬の鳥
紅葉越えビル越え東京タワーの影
冬日差墓石綺麗に並びある
小六月東京タワーでゆるゆると

恭子
純子
典子
喜孝
美代子
敏子

二〇一三年十一月十七日

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 **俳句界** 2014年1月号

結社を考える③ **俳句三協会 幹事長座談会**

染谷秀雄 (俳人協会) × 前田弘 (現代俳句協会) × 坊城俊樹 (伝統俳句協会)

対談 佐高信の 甘口でコンニチハ! **北島三郎** (演歌歌手)

★セレクション結社「春嶺」小倉英男

魅惑の俳人 **田川飛旅子** *インタビュー 中村和弘

私の一冊 山崎ひさを「青山」

◆日本全国わが郷土の富士を詠む
依田明倫 新谷ひろし 白濱一羊 阿部月山子
遠藤若狭男 古賀しくれ 長島衣伊子
涼野海音 秋篠光弘 淵脇 謙 他

◎新春特別企画 **読者投稿欄選者競詠**

有馬朗人 池田澄子 伊藤通明 茨木和生 大串章
角川春樹 辻桃子 豊田都峰 宮坂静生 山本洋子
大高露海 佐藤麻績 田中陽 名和未知男 山下美典
岸本マチ子 石井いさお 朝妻カ 山尾玉藻

★お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

獐 回 頭

高島茂 選評

草花生けて慰安婦寫真展秋の雨

石森 和子

公民館かどこかの会場で、かつての軍慰安婦の写真展が催されている。作者は、雨の降りつづく秋の一日、心に止めていた、痛ましい彼女たちの戦争の犠牲といつては、余りにも大きな代償である。この映像に心傷めて観ているのである。同性としての悲しみと怒りを胸に秘めて。

(一九九二年十二月)

目の朱の退めつつうさぎうごきけり

佐藤 喜孝

死ぬ免撫でをり神もそばにをり

あしうらの毛のふさふさとうさぎ死す

うさぎ死すうさぎのゑさをたぎのこし

家族の一員のように、ながく一緒に暮らしていた兎の臨終に立ち合う作者の思いはあまりにも悲しい。死ぬ兎の哀れが心にこたえる。犬にしろ猫、小鳥もそうであるが、可愛がっていたいきものに死なれる程つらい事はない。必ず別れなければならぬのなら、はじめから一緒に暮らさ

なければよいのである。心が通じあった生き物に死なれると、もう二度と世話などしたくないと思うのは、物言わぬ小動物の不憫からくるのである。口を結んで、しづかな息をして動いたと思うとすでに息絶えている。その兎をいつくしむように撫でる作者。神とともに一つの生命の終わりを見とどけているのである。ふくよかな毛並、脚もまだ温みがある。みるとかたわらの餌の草もむなしく残っている。ルナールの博物誌の中に出てくる兄弟の兎の、ルクリも仲良く一緒に葉っぱを食べていて、突然臨終を告げられる。ルナールも可愛がっていた兎の死を深い思いで綴ったに違いない。雑詠集に度々詠われた、佐藤家の兎である。生きとし生けるものの宿命とはいえず、あまりにもはかないものである。この一連の作品は、よしたかさんの思いの籠った哀悼詩である。

(一九九三年二月)

高島茂を知らぬ人などには詰らぬコーナーであったであらう。振返ると、高島茂は好き嫌ひがはっきりした人であった。しかしボルガといふ職場、表向きは人当りのよい柔和な人と受取られてゐたかとおもふ。編集人として会員との間に立ちいささか心を砕いた。改めて『獐』をのぞき見てあの当時のわたしの熱気を今一度思ひ返した。

(喜孝)

はげます膝

佐藤喜孝

十三夜木枯は膝はげまして
驢馬はなく秋に大きな穴をあけ
ゆたんぽのかはりのやうな古寫眞
ことだまにいつもおくれて日向ぼこ
てふてふもうぐひすも連れ伊賦夜坂

春の水しらべつくして逝きにけり
内と外どちらもこはし浮袋
ししむらのひとひらもなしをりづるに
大川の波の數ほどをどりの輪
どこどこでさよならをいふ梅の枝

あとがき

一月号のあとがきで「ことしはよいことばかりつづくやうに願ってゐる」と書いたが甘い。五十、六十才を過ぎたら一年といふ時の積重ねが重たい。「あを」には優れた人生の先輩がをられる。云はれる言葉をかみしめ、生き方を知ること、叱咤激励される。つくづく「あを」がある事で私は大いに元気づけられてゐると思つた。この万分の一でもお返しが出来ればと「あを」を発行してゆきたい。改めてさう思ふ今年である。まさに「花を藝ゑて以て蝶を邀ふべし」である。

秘密保護法とかいふ法案が成立する。(書いている時点ではお祭騒ぎ) 憲法を読んでみた。素人読みだが憲法違反にみえる。でも自民党と公明党に票を入れた人が多かったのだからしょうがないのだらう。投票してからも国民の声を生かせる、聞いてもらへるそんな方法があれば議員に騙されないのだが。これも全く床屋談義だが、憲法がこんなに軽んじられてゐる一因は最高裁判所にあると常々思つてゐる。九条と自衛隊はどう見ても整

合しない。最高裁が判断を避けずにもともに仕事をしていけば、自衛隊をなくすか憲法を変えるか国民が判断しなければならぬ事になった。責任ある国民になったのが権力といふ得体の知れぬものに押流され無気力な国民になつてしまった。のではないかなあ……………。

俳句誌のあとがきに相応しくない後書になつてしまつた。ごめんさい。でもちよつと前、作つた俳句が犯罪になる時代があつたのだから油断は出来ない。(喜孝)

二〇一三年十二月号

発行日 十二月五日
発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090 9828 4244
ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝

郵便振替 00130655526 (あを発行所)
会費 一〇〇〇〇円 (送料共) / 一年

乱丁・落丁お取替えます。